

シルクロードの貨幣と文字

吉池孝一

1. シルクロードの貨幣とは

シルクロードの貨幣とはなにか。シルクロード（絹の道）という現在では絹の売買にかかわらず広くユーラシアの東と西を結びつける交易路を指すようである。したがって、シルクロードの貨幣という東西交易路上で使用された諸々の貨幣ということになるだろうか。しかしながら、東西交易路上の貨幣自体に、互いを結びつけ一類とするような特徴があると考えれば、それは幻想であろう<sup>1</sup>。ここで言う“シルクロードの貨幣”とは、東西交流の中に貨幣を位置つけたならば何が見えてくるかということを経験したものとお考えいただきたい。そこで学問としては、東西交易路上の貨幣を網羅的に取り上げるのが理想であるが、今の段階ではそういうわけにはいかない。任意の貨幣を取り上げなければならず、それはとりもなおさず、都合の良い資料によって自説を組み立てるということであり、これもやはり幻想から五十歩ほどのものである。

さて、東西交易路と言ったばあい、タリム盆地周辺を経由して東西を結びつける狭義の交易路もあれば、海のシルクロードと呼ばれるものもあるが、ここでは狭義のシルクロード上の諸貨幣を扱うことにする。なお、この交易路にそって、貨幣自体が持ち運ばれたことはもちろんのことであり、貨幣の発行地から遠く離れた地点でその貨幣が発見されたならば、それは互いの交流を示すものとして貴重な資料となる<sup>2</sup>。しかしながら、小稿ではそのようなものは扱わず、“貨幣の様式”がどの様に伝播したかということを経験する。すなわち、どの様な貨幣がどこから発行されたかということを経験するのである。

次に、“貨幣と文字”と題したのはなぜかということを経験しなければならない。貨幣に記された銘文は様式の一つである。そして小稿では、様式の一つである銘文の形式と、その銘文を綴る文字を中心に話をすすめることになる。これは“シルクロードという異なる民族が接触した舞台で何が起こったか。それを貨幣銘文という文字資料をとおして見てみよう”ということである<sup>3</sup>。

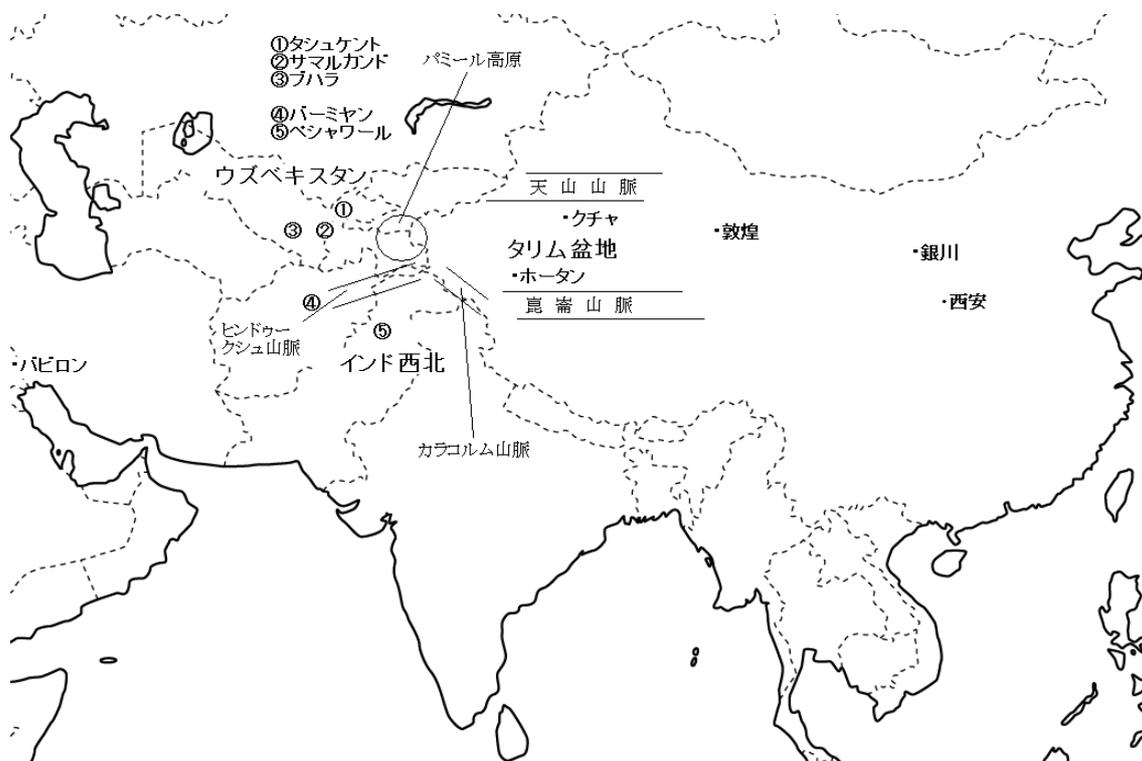
<sup>1</sup> 康柳碩 1999 はシルクロードの貨幣(絲綢之路貨幣)につき次のように述べる。“目前，關於絲綢之路貨幣的研究在觀點上還不一致。有的人認為沒有絲綢之路貨幣，只有絲綢之路上各個國家的貨幣，他們認為絲綢之路上各個國家的貨幣之間沒有內在的聯繫，不能互相流通。我們認為，這種孤立地看待絲綢之路貨幣問題的觀點，是一種狹隘的觀點。從系統論的角度出發，絲綢之路上各國的貨幣不是孤立的，而是有聯繫的。這樣，就提出一個大系統的歷史概念，即絲綢之路貨幣。正像絲綢之路是中國通向西方的交通路線的總稱一樣，絲綢之路貨幣是指絲綢之路上各個國家和地區鑄造、打制、流通、使用過的貨幣的總稱”(7頁)。すなわち、シルクロード上の諸貨幣の間には内的な関係はないとする見方もあるが、系統論的にみる(从系統論的角度出發)ならばシルクロード上の貨幣は孤立しておらず互いに関係を持っているという。“系統論”が何を指すかこれだけではよくわからないが、要するに、シルクロード上の様々な貨幣を総称して“シルクロードの貨幣(絲綢之路貨幣)”として研究の対象とするということであるようだ。そうではあるのだが、研究に先立って、シルクロードの貨幣に何らかの内的な関係を認めるのは困難であることもまた事実であろう。

なおシルクロードの貨幣を扱ったものには前掲書の他に渡邊 1973、新疆錢幣圖冊編輯委員會 1991、田辺勝 1992 がある。

<sup>2</sup> 張忠山 1999 にはそのような資料が紹介されている。

<sup>3</sup> 東アジアを舞台とした文字文化の接触については吉池 2009a で考えた。ご参照いただければ幸いです。

これより、下の地図を参照しながら、ユーラシアを西から東に、そして東から西に、貨幣の道あるいは文字の道ともいえる道をたどってみる。



## 2. 貨幣の様式

先に“貨幣の様式”といったが、貨幣の様式とは何か。貨幣は、円形か方形かなどの形態、打刻か鋳造かなどの製造法、および銘文(文字と言語、支配者名・神名・貨幣単位・年号などの表現形式)や図像において、地域や時代の別により一定の型を持っている。このような一定の型を“貨幣様式”と呼ぶ。そこで、シルクロードの貨幣をごく大雑把にながめると幾つかの様式のあることを見て取ることができる。

- I. ギリシアの円形・金型打刻銭<sup>4</sup>。人物像(神や支配者)を図像として用い、その周囲にギリシア文字・ギリシア語による銘文(王名の属格をふくむ)を配する<sup>5</sup>。
- II. 中国の円形方孔・鋳造銭<sup>6</sup>。漢字・漢語により貨幣単位や年号などを記した銘文をもつ。通常は図像を用いない。

<sup>4</sup> 素材の両面を二つの金型で挟み、金型の一方をハンマーで叩き文様を打ち出した貨幣。なお、打刻技術の変遷についてはジョナサン・ウィリアムズ 1998 の 244-245 頁参照。

<sup>5</sup> 田辺 1992 参照。「ギリシア世界はマケドニアのフィリッポス II 世によって統一されたが、フィリッポス II 世は表に神の胸像、裏面にマケドニアの民族意識の高揚を暗示する騎馬像、戦車競争図などを刻印し、発行者たる国王の名前(属格)をギリシア文字で示した。その息子のアレクサンダー III 世(大王)はアケメネス朝を前 330 年に滅ぼし、西はエジプト・地中海から東はインダス川・オクサス川に及ぶ大帝国を作った。そして、オリエントにははしだいにヘレニズム文化が熟成していった。大王は表にヘラクレス神、裏面にゼウス神と自分の名前(アレクサンドロスという属格)を刻印した 4 ドラクマ銀貨を標準貨幣として発行した。表のヘラクレス神は大王の肖像ともいわれるが、以後、オリエント世界にはこの大王のコイン・タイプが踏襲されるようになった。」(54 頁)。

<sup>6</sup> 鋳造法については山田 2000 の 223-228 頁参照。

Ⅲ. インドの方形・打刻印銭。様々なマークを図像として用いる<sup>7</sup>。

Ⅳ. イスラムの打刻銭。アラビア文字による宗教的な銘文をもつ<sup>8</sup>。

I はギリシアの代表的な貨幣様式であり、II は中国の代表的な貨幣様式である。シルクロードにあつては I と II が主要な貨幣様式で、ⅢとⅣはその次に位置するようにおもう。そして、I と II とⅢとⅣが接触する地域では、それぞれの様式の一部が混合して現れたり、新たな様式が作られたりする。次の段階として更にそれが伝播することになる。

小稿では、上に述べた貨幣の様式がどのように伝わったか即ちどのような貨幣がどこから発行されたかということを見る。交易路に沿って貨幣そのものがどこまで持ち運ばれたかということを見るわけではないことを強調しておきたい。

### 3. 貨幣の道：五つの出来事(1)

さて、下限を紀元 7-8 世紀頃までとして、シルクロードの貨幣を俯瞰すると、そこに第一より第三の出来事を見て取ることができる。さらにそれ以後には第四と第五が起こった。

第一、ギリシアの貨幣様式とギリシア文字銘文の東漸

第二、二言語併用貨幣の出現と伝播

第三、中国の貨幣様式と漢字銘文の西漸

第四、ソグド系文字銘文の東漸

第五、アラビア文字銘文の東漸

第一のギリシア貨幣様式の東漸であるが、その東限は、パミール高原の西、ヒンドゥークシュ山脈北側のバクトリアが興った地域である。ここはアレクサンドロス大王(在位。紀元前 336-323 年)の死後、ギリシアの遠征軍によって建てられた王朝であり、ギリシア文字銘文をもつギリシア貨幣様式の貨幣が発行された。紀元前 3 世紀中頃のことである<sup>9</sup>。その後、この勢力はインド西北に進出し、それにともないギリシアの貨幣様式もインド西北に伝播することになる。

第二の二言語併用貨幣の出現と伝播であるが、これはパミール高原の南にあたるインド西北での出来事である。先に述べたように、ヒンドゥークシュ山脈の北側でバクトリアが興りギリシア様式の貨幣が発行されたわけであるが、この勢力は、その後ヒンドゥークシュ山脈を越え、その南側のインド西北部に進出した。新たに進出したインド西北部はカローシュティー文字で書かれたプラークリット語(以後ガンダーラ語と呼ぶことにする)が行われていた地域であり、この地域への進出の後、支配者の文字と言語であるギリシア文字・ギリシア語と被支配者の文字と言語であるカローシュティー文字・ガンダーラ語が併記された貨幣すなわち二言語併用貨幣が発行されることとなった<sup>10</sup>。紀元前 2 世紀中頃のことで

<sup>7</sup> ジョナサン・ウィリアムズ 1998 の 172-173 頁およびグプタ 2001 参照。形態については、円形、不定形、長方形、正方形など様々であるが、方形貨幣をもつことがインド貨幣の特徴となっている。製造法であるが、素材の片面もしくは両面に様々な印を打刻した貨幣すなわち打刻印銭、金型打刻銭、鑄造銭の三種がある。このように製造法は出揃っているが、打刻印銭の存在がインド貨幣の特徴となっている。打刻印銭は打刻銭の一種であるが、全面を覆う金型で挟み込んで打刻するのではなく、マークを一つ一つ打刻したものである。なお、インド貨幣の日本語概説として平野 2003 が参考となる。

<sup>8</sup> ジョナサン・ウィリアムズ 1998 の 129-162 頁参照。

<sup>9</sup> 田辺 1992 参照。

<sup>10</sup> 中村 2004a, b 参照。

ある。この二言語併用貨幣の出現はおそらくは世界最初のできごとであろう。

その後、このような二言語併用貨幣はタリム盆地周辺にも現れることになる。①ホータンのシノ・カローシュティー銭（紀元 2 世紀後半。漢字とカローシュティー文字）<sup>11</sup>、②クチャの亀茲五銖銭（紀元 5～7 世紀。漢字とブラーフミー文字）である<sup>12</sup>。さらに③ソグディアナ周辺で二言語併用貨幣（紀元 7～8 世紀。ソグド文字と漢字）が発行された<sup>13</sup>。この流れは、④モンゴル時代の二言語併用貨幣（紀元 13～14 世紀。アラビア文字とモンゴル文字）<sup>14</sup>、さらにそれより数百年後の⑤清朝の新疆紅銭（ベニセン）（紀元 17 世紀以降。漢字と満洲文字とアラビア文字）<sup>15</sup>にまで及ぶものとおもわれる。

第三の中国貨幣様式の西漸であるが、その西限はパミール高原を西に抜けた現在のウズベキスタン共和国（古のソグディアナの地）のブハラ辺りである。この地からはブハラのタムガ（支配者のマーク）と“開元通寶”という漢字銘文が鑄込まれた円形方孔・鑄造銭が出土する<sup>16</sup>。“開元通寶”という銘文は、唐の高祖が武徳四年(621)に発行した開元通寶銭を模倣したものともみることができるから、ブハラの貨幣は紀元 7 世紀から 8 世紀のものということになる。

#### 4. 貨幣の道：五つの出来事(2)

第四のソグド系文字銘文の東漸については次のようなことである。ソグド文字は、ソグド語というイラン語系の言語を記した文字であり、カスピ海とパミール高原のあいだに位置するソグディアナ、現ウズベキスタン一帯で使用され、その後アジアの北部へと持ち込まれ、ウイグル文字（9～14 世紀）、モンゴル文字（13 世紀～今に至る）、満洲文字（17～20 世紀）と改良されながら東方に伝わったとされる。現在では中国新疆ウイグル自治区の錫伯(ᠰᠢᠪ)族の錫伯文字、中国内蒙古自治区のモンゴル文字として使用されている。これらの文字をソグド系文字と称するわけであるが、この文字の銘文を持つ貨幣としては様々なものが発行されている。7-8 世紀にはソグド語銘文の貨幣<sup>17</sup>、9-13 世紀にはウイグル語銘文の貨幣<sup>18</sup>、13-14 世紀のモンゴル時代にはモンゴル語銘文を持つ貨幣が各ハン国から発行された<sup>19</sup>。17 世紀以降は、清朝より満洲文字銘文の貨幣が発行された<sup>20</sup>。なお、モンゴル文字・モンゴル語銘は、現代のモンゴル国のコインや紙幣、中華人民共和国の紙幣にも採用されている。

第五のアラビア文字銘文の東漸については次のようなことである。7 世紀以降、イスラム

11 小谷 1999 参照。

12 亀茲五銖銭は二言語併用の小型の方孔円銭。亀茲は現在のタリム盆地北側の庫車（クチャ）県に相当。玄奘『大唐西域記』（7 世紀前半）の屈支国（亀茲）の条に「貨幣には金銭・銀銭・小銅銭を使用している」とある「小銅銭」がこれであるともされる。蘇暉・劉玉榮 1998 の 54-56 頁によると、5 世紀～7 世紀に亀茲で鑄造されたもので、ブラーフミー文字トカラ語が書いてあるらしい。

13 Смирнова 1981 の 100-101 参照。

14 中村 2005b, d 参照。

15 新疆錢幣圖冊編輯委員會 1991 参照。

16 Смирнова 1981 の 316-318 頁参照。

17 Смирнова 1981 参照。ソグド貨幣の日本語概説として平野 2004 が参考となる。

18 吉池 2006 参照。

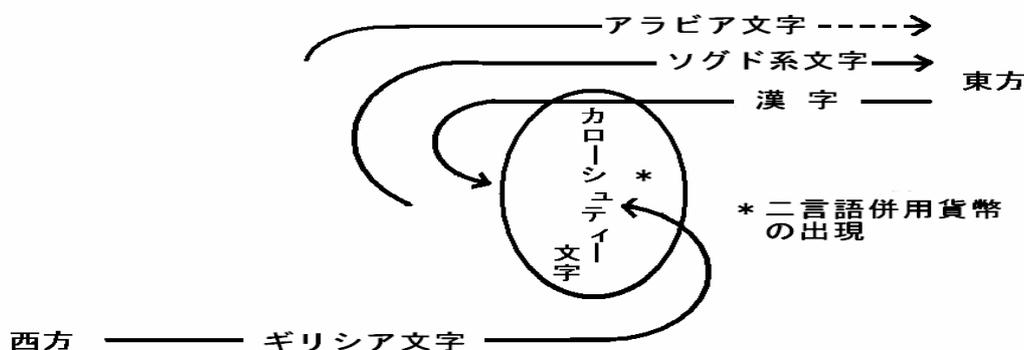
19 中村 2005b, d 参照。

20 新疆錢幣圖冊編輯委員會 1991 および中村 2005a および寺澤 2004 参照。

の拡大にともない、アラビア文字銘文をもつ貨幣の発行地も拡大し、西は黒海南岸に沿ってスペインにいたる<sup>21</sup>。東に目を転ずるとインドから東南アジアにまで拡大した。アラビア文字銘文の貨幣は、ヨーロッパおよび東アジアの貨幣銘文と対峙しつつ、ほぼ全世界に拡大した<sup>22</sup>。それにもかかわらず、ここでは“アラビア文字銘文の東漸”と表現したわけであるが、これは狭義のシルクロードに限った状況について述べたものである。シルクロードを中心として東西の地域をみると、10世紀頃にはカラハン朝からアラビア文字銘文の貨幣が<sup>23</sup>、13-14世紀のモンゴル時代にはアラビア文字銘文を持つ貨幣が各ハン国から発行された<sup>24</sup>。元朝においても、これは一般に通行した貨幣ではないがアラビア文字を含む“四体字銭”が発行された。17世紀以降は、清朝版図の西北地域に限られることであるが、満洲文字とアラビア文字と漢字が併記された貨幣が発行された<sup>25</sup>。現代にあっても、中華人民共和国の紙幣をみると、モンゴル文字・チベット文字・ラテン文字チワン語とともに、アラビア文字に発するウイグル文字・ウイグル語で“中国人民銀行”と書かれており、中国が多民族国家であることを示している。

#### 5. 貨幣銘文の交流：模式図

以上簡単に五つの問題にふれたわけであるが、この五つにつき、貨幣銘文に使用された文字に着目して模式図を描くと次のようになる<sup>26</sup>。この模式図は貨幣の様式と銘文の文字によって描いたものにすぎないが、ユーラシアの文化の交流がどのようになされたかという一般的な型とも重なり合う部分がある。



#### 【参考文献（発行年順）】

- 21 ジョナサン・ウリアムズ 1998 の 139 頁参照。スペイン・ウマイヤ朝より 770 年に発行された銀貨が掲載されている。
- 22 イスラムの貨幣については Mitchiner 1977 参照。
- 23 Камышев 2002 の 103 頁参照。
- 24 中村 2005b, d 参照。
- 25 新疆貨幣圖冊編輯委員會 1991 および中村 2005c 参照。
- 26 第一より第三の出来事については吉池 2009b で述べ模式図も提示した。

- 渡邊 弘 1973. 『西域の古代貨幣』, 学習研究社。
- Смирнова О. и. 1981. *Сводный каталог согдийских монет. Бронза*. Москва: Наука.
- M. Mitchiner 1977. *Oriental coins and their values. The World of Islam*. London: Hawkins Publications.
- 新疆錢幣圖冊編輯委員會 1991. 『新疆錢幣』, 新疆美術攝影出版社・香港文化教育出版社。
- 田辺勝美編 1992. 『[平山コレクション]シルクロードのコイン』, 講談社。
- 蘇擘・劉玉榮 1998. 『古幣尋珍』, 文物出版社。
- シヨハチ・ウリアス編/湯浅起男訳 1998. 『図説 お金の歴史全書』, 東洋書林。第 1 刷 1998 年, 第 2 刷 2002 年。
- 張忠山主編 1999. 『中国絲綢之路貨幣』, 蘭州大学出版社。
- 康柳碩 1999. 「第一章總叙 絲綢之路與絲綢之路貨幣」, 『中国絲綢之路貨幣』蘭州大学出版社, 3-9 頁。
- 小谷仲男 1999. 「シノ・カロシュティ貨幣の年代 —付録『後漢書』西域伝訳注—」, 『富山大学人文学部紀要』第 30 号, 17-48 頁。
- 山田勝芳 2000. 『貨幣の中国古代史』, 朝日新聞社。
- P. L. Гупта著/山崎元一他訳 2001. 『インド貨幣史 —古代から現代まで』, 刀水書房。
- Камышев А. К 2002. *Раннесредневековый монетный комплекс Семиречья*. Бишкек: Раритет Инфо.
- 平野伸二 2003. 「古代インドの打刻印貨幣と土着の貨幣 —ブッタの時代から 3 世紀頃まで—」, 『収集』Vol. 28 No. 3, 10-17 頁。
- 平野伸二 2004. 「古代から中世のシルクロードの貨幣 —ソグド地方とその周辺地域—」, 『収集』Vol. 29 No. 7, 42-50 頁。
- 寺澤知美 2004. 「“天命汗錢”について」, 『KOTONOHA』第 20 号, 4-5 頁。
- 中村雅之 2004a. 「インドギリク貨幣の銘文 —アポロトス 1 世の方形銅貨—」, 『KOTONOHA』第 21 号, 1-3 頁。
- 中村雅之 2004b. 「カローシュティ文字貨幣 3 種」, 『KOTONOHA』第 22 号, 1-3 頁。
- 中村雅之 2005a. 「清朝紅錢の満洲文字」, 『KOTONOHA』古代文字資料館発行(愛知県立大学 E511 内)第 29 号, 1-4 頁。
- 中村雅之 2005b. 「イル・ハン朝の二言語貨幣初探」, 『KOTONOHA』古代文字資料館発行(愛知県立大学 E511 内)第 34 号, 1-4 頁。
- 中村雅之 2005c. 「ラシーディーンの紅錢(=回文錢)について」, 『KOTONOHA』古代文字資料館発行(愛知県立大学 E511 内)第 35 号, 1-3 頁。
- 中村雅之 2005d. 「ジャニ・ベグ(キプチャク汗国)の貨幣二種」, 『KOTONOHA』古代文字資料館発行(愛知県立大学 E511 内)第 36 号, 1-4 頁。
- 吉池孝一 2006. 「ウイグル亦都護錢の銘文」, 『KOTONOHA』古代文字資料館発行(愛知県立大学 E511 内)第 44 号, 10-15 頁。
- 吉池孝一 2009a. 「東アジアの漢字関連文字」, 『現代中国への道案内Ⅱ』白帝社, 85-110 頁。
- 吉池孝一 2009b. 「貨幣の道」, 『KOTONOHA』古代文字資料館発行(愛知県立大学 E511 内)第 79 号, 12-16 頁。